すみれの会記録

１　日時　平成２２年７月９日　１８：３０～２０：３０
２　場所　さいたま市民会館うらわ
３　内容
　前回の、すみれの会での話し合いでは、各先生方の事例を検討しました。

○境野先生：「人とのふれ合いの中から児童の新たな発見や気付きを生み出す４５分の授業展開」

・トップアスリートだった方をゲストティーチャーとして招いた授業。その際の授業の工夫として、
　①講師と児童が互いに話しやすい活動の工夫
　②講師の人柄にふれることができるような活動の工夫
　③講師の思いや考えと自らの夢に対する考えとを比較できるような活動の工夫
をあげ、開発した教材を４５分の中でどのように活用したらより効果的な授業として成立するのかを目指した実践。

（嶋野先生より）
　子どもたちが夢について様々な意見をもっている。ただし、これはあくまでもまだ情報としてあるのみにすぎない。これを今後「○○さんの夢は…」「○○さんの夢は…」とふれていく中ではじめて夢が一般化できる。自分ごととして夢をとらえていけるとよいのではないか。

○堀　先生：「町探検での安全面や探検場所」

・学年全体で町探検を行う際に留意することや、児童の探検場所についての話し合いが行われた。

（嶋野先生より）
　町探検では自分たちの地域に対して親しみや愛着をもつことがねらいとしてある。学年全体ではなく、自分たちだけが外に出ているというドキドキ感やワクワク感をもって担任とクラスでちょっとしたことを基にして深く町にかかわっていくことができるような工夫が必要である。深くかかわっていく中で、地域が安全な場所であるということを子どもたちが認識していくことが大切。

○齋藤先生：「自分自身の成長への気付きに視点を当てた授業展開」

・第２学年の野菜の栽培活動において自分自身の成長を自覚していないＡ児の気付きを基に、Ａ児や他の児童が自分自身の成長に気付くために学級全体で話し合いを行った実践。

（嶋野先生より）
　生活科では当初から情緒性を大事にしてきた。情緒的な気付きを基により強い情緒的なかかわりにしていくことも気付きの質を高めていくことであり、生活科の原点である。気付きの質の高まりを求めていく際に、科学的な見方や考え方の基礎にばかり目が向いていくのではなく、情緒的な気付きを大切にしてそれを高めていくことも研究していけるとよい。

（文責：若村　健一）